



北極の気候変動と 先住民の文化

地

地球温暖化とグローバル化の影響は北極域の社会、とくに現地の先住民に様々な影響を与えている。このオンラインセミナーでは、人類学者や言語学者として、長期にわたってアラスカとサハリンの先住民社会に係わっている研究者から、言語や文化の継承活動や気候変動への生活への影響について具体的に提示してもらい、さらに近年の国際的な北極研究の動向を踏まえながら、言語学や人類学の調査のあり方について考えたい。

2021
10.9 (土)



視聴はこちら

YouTubeにて生配信 12:00 ~ 13:00



← 90分版はこちら
東北アジア研究センター
YouTube公式チャンネル

1 講演

21世紀のアラスカ：
地球温暖化、先住民狩猟社会、大規模資源開発の間で

生田博子 (九州大学)



2 講演

グローバル化とサハリン少数民族

白石英才 (札幌学院大学)

3 総合
討論

コメンテーター 榎本浩之 (国立極地研究所)

司会 高倉浩樹 (東北大学)

Profile

生田博子 (九州大学准教授)

人類学者。現在は北極圏の生存狩猟・漁労、気候変動が環境や人の生活に与える影響、持続可能な開発などの研究に取り組んでいる。

白石英才 (札幌学院大学教授)

専門は言語学、音韻論。最近ではニヴフ語の母音組織、特に円唇母音が見せる周辺言語(アイヌ語、ツングース諸語等)との分布の類似性に着目している。

榎本浩之 (国立極地研究所教授、ArCS II プロジェクトディレクター)

専門は雪氷と気候変動。雪氷域を訪れ環境変化の原因を調べているが、最近では、社会に与える影響や対処する文化を見る機会が増えている。

高倉浩樹 (東北大学教授、ArCS II 社会文化課題研究課題代表者)

専門は社会人類学、シベリア民族誌。最近では気候変動の学際研究や災害人類学・映像人類学にも関心を広げている。

お問合せ

東北大学東北アジア研究センター事務局
TEL. 022-795-6009
E-mail. asiajimu@grp.cneas.tohoku.ac.jp





オンラインセミナー

北極の気候変動と 先住民の文化



アラスカ・ノーススロープ油田



SIUでのセイウチの狩猟



21世紀のアラスカ： 地球温暖化、先住民狩猟社会、大規模資源開発の間で

生田博子 (九州大学)

北極圏は、地球温暖化の最前線にある。アラスカは、道路がなく、飛行機やボートが重要な交通手段となる僻地が多く、そこに住む人々は野生のクジラ、セイウチ、アザラシ、白熊、トナカイ、ヘラジカなどを日々の食卓にのせるために生存狩猟をしている。一方、アラスカも21世紀におけるグローバル経済、米国資本主義社会の一部。州の収入の80%を占める石油開発を始め、天然ガス、金鉱、林業、漁業等、自然の資源開発が州の経済を支え、その多くが日本に輸出されている。私は約20年間アラスカに在住し、前職ではアラスカ州政府研究機関で主任研究員をしていた。米国連邦政府、アラスカ州政府、先住民社会が、どのように北極圏の地球温暖化に向き合い、野生動物の保護、資源開発、先住民文化の保存に取り組んでいるのかを紹介する。

サハリン州博物館



グローバル化とサハリン少数民族

白石英才 (札幌学院大学)

北海道の宗谷海峡を北に40キロ隔てたサハリン島は地下資源の宝庫であり、1990年代から欧米の石油会社が参入して海底油田・天然ガスの採掘を行っている。サハリン産天然ガスの7割は日本が輸入し、国内需要の1割を賅っている。このように日本はサハリンの恩恵を最も受けている国の一つである。その一方、こうした資源開発はニヅフ、ウイльтаといったサハリン少数民族の生活に大きな影響を及ぼしている。地域経済の活性化により生活水準が向上する一方、民族の言語や文化は無用のものとしてロシア語や英語に取って替われ、世代間の継承が途絶えつつある。そうした中、民族語を母語としない世代の中には民族の言語や文化に価値を見出し、改めてその継承の道を探る動きが出てきている。本発表では、2000年代からニヅフ語の現地調査を続けてきた発表者がそうした経緯を紹介し、グローバル化する地域社会における少数言語の継承活動について考察する。

2021
10.9 (土)



視聴はこちら

YouTubeにて生配信 12:00 ~ 13:00



←90分版はこちら
東北アジア研究センター
YouTube公式チャンネル